

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32612  
 研究種目：基盤研究(C)（一般）  
 研究期間：2018～2023  
 課題番号：18K00621  
 研究課題名（和文）本土諸方言・時代語の動詞・形容詞の活用・アクセント活用体系の実証的・理論的研究

研究課題名（英文）Empirical and theoretical research into the conjugation and accent conjugation of verbs and adjectives in mainland Japanese dialects and period Japanese

研究代表者  
 屋名池 誠（Yanaike, Makoto）  
 慶應義塾大学・文学部（三田）・名誉教授

研究者番号：00182361  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：研究の前半は計画通り順調に進んだが、高齢者が対象の臨地調査は、2020年からはCovid19のため中止せざるをえなかった。

それでも、アクセント活用に関しては、京阪アクセント地域の周辺部の特異な性格のアクセント体系において貴重なデータを収集することができ、京阪系アクセントにおけるアクセント活用のそれぞれ個性的なあり方を中世以降の歴史的な分化の結果として統一的に跡付けうる見通しをえることができた。活用については、文献資料による歴史的研究が進展し、二段活用のメカニズムと一段活用化の動因、音便形の成立プロセスなどを詳細に明らかにすることができた。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の動詞・形容詞活用の研究は、具体的な語形を列挙する程度の素朴な現象記述の域にとどまり、時代語や方言の多様なあり方を整理することも、なぜそのような語形変化をするのかを説明することもできていなかった。日本語動詞・形容詞は活用と同時にアクセントも語形変化（「アクセント活用」）するのだが、こちらはほとんど研究として取り上げられてすらきていない。

本研究は、各時代・諸方言の活用・「アクセント活用」を新しい簡明な方法で統一的に記述し、歴史的な変化や地理的な差異までも説明しようとするもので、国語教育や日本語教育での活用が期待できる。

研究成果の概要（英文）：The first half of the research went smoothly as planned, but fieldwork had to be suspended from 2020 due to Covid19.

As for accent conjugation, we were able to collect valuable data on the accent systems with unique characteristics in the peripheral areas of the Keihan accent region, and we gained the prospect of tracing the distinctive forms of accent conjugation in the Keihan-kei accent in a unified manner as a result of historical differentiation since the Middle Ages. Regarding conjugation, historical research based on documentary sources has progressed, and it has become possible to clarify in detail the mechanism of *nidan-katsuyo* two-stage conjugation, the driving force behind *ichidan-katsuyo-ka*, and the process by which *onbinkei* was established.

研究分野：日本語学

キーワード：動詞 形容詞 活用 アクセント活用 二段活用 音便形 日本語方言 日本語史

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語動詞・形容詞の活用の研究は、江戸時代以来の蓄積を持つが、いまだに具体的な語形を列挙する程度の素朴な現象記述の域にとどまっており、それも古典語や現代標準語はあつかえてもさまざまな時代語や方言の多様なあり方までを統一的に整理・記述することができないものばかりであった。諸時代語や諸方言を同一の基準で比較・対照できないために、時代差や地理的な分布も精密・正確にとらえることができないため、そうした差異が生じるプロセスや機構を考えることはできず、ましてや、それらの系譜関係を再建したり、そもそもなぜ日本語の動詞・形容詞にはこのような活用が存在するのかなど、多様性のうらに通底する本質を追求する高次のレベルの研究に歩を進めることなどはできない状況であった。

日本語動詞・形容詞は活用すると同時に、アクセントも語形変化(「アクセント活用」)するのだが、こちらについては活用研究以上に寥々たる状況で、ほとんど研究として取り上げられてきていなかった。日本語のアクセント研究は理論研究・方言研究・歴史的研究いずれの面でも高い水準を誇っているが、「アクセント活用」のような形態論レベルの現象には理論・方言・歴史いずれの面でもほとんど研究の手が及んでいないのである。これは「アクセント活用」が活用と深くかかわっているため、活用の記述研究がおくれていたため、「アクセント活用」の記述方法すらほとんど考えられたことがなく、実証的な記述研究などおこなわれるべくもなかったからである。

### 2. 研究の目的

本研究は、各時代・諸方言の活用・「アクセント活用」を新しい簡明な方法で統一的に記述することで、精密な比較・対照を可能にし、地理的分化の機構や原理、歴史的な変化の実態とその動因を探り、それらの背後に通底する活用・「アクセント活用」の本質に迫ることも目標としている。それを具体的に述べれば：

研究代表者は動詞・形容詞の活用と「アクセント活用」とを時代語・諸方言までふくめて統一的に、また精密ながら簡明に記述できる方法を考案し、これの検証と理論的な拡張を兼ねて、

平成 20 年度～22 年度科研費基盤研究 (C)

「日本語動詞・形容詞の活用・アクセント活用の記述方法の研究」

平成 23 年度～25 年度科研費基盤研究 (C)

「日本語諸方言動詞・形容詞の活用・アクセント活用の系譜関係解明のための基礎的研究」

平成 26 年度～29 年度科研費基盤研究 (C)

「日本語諸方言動詞・形容詞の活用・アクセント活用の原理と変異条件についての総合的研究」

で研究費を受給し、特異な活用・「アクセント活用」を有する全国 30 箇所の方言を臨地調査して、統一的な基準にもとづいたデータを収集してきた。しかし、いまだ残り数箇所の重要地点の調査が未完了だったので、それら地点の臨地調査をおこなって必要なデータを整えることが本研究の第一の目的である。

こうして得た現代方言のデータと、文献によって知られる各時代の「アクセント活用」のデータとを総合的に見ることで、それらの相互関係を位置づけ、系譜関係を明らかにすると

ともに、それらが分岐した年代やそれぞれの個性的なあり方が生じた要因にも迫ることが第二の目的である。

活用において特徴的な存在となっている二段活用や音便形はどういうメカニズムによって成り立っているのか、また、活用の歴史において重要な変化である、二段活用の一段化や音便形の成立はなぜ生じたのか、文献のみならず方言の実態をも考慮しつつ明らかにしてゆくことが第三の目的である。

形容詞に比べ、より複雑な内部構造をもつ動詞にあって、その構成要素メンバーの出入りの時代的な変化を明らかにすること、構成要素間の膠着方法を活用以外のものと比較して活用ならではの特性をあきらかにすることで、活用の存在意義を明らかにしたいというのが第四の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究では、方言の臨地調査と、文献史料による諸時代語の分析とを研究の両輪としている。

臨地調査は、各地点の、なるべく外住歴の少ない高齢話者に依頼し、対面で、想定される活用・「アクセント活用」の変異条件ごとに用意した語例について、その場でこちらの求める変化形に変えて発言してもらう形式で調査をしてきた。

活用の歴史的変化のうち、二段活用の一段化は、その先行例が見られる上代文献と、一段化が活発におこなわれた中世の文献を史料とし、音便形の成立過程については、中古の訓点資料や、撥音・促音・長音や清濁に関して正確な表音表記語例が豊富に得られる中世末期の『日葡辞書』を史料として分析を行った。

「アクセント活用」の歴史的変化については、(すでに平安・鎌倉の分析は終わっている)江戸期の『平家曲節』について分析をおこなった。

動詞の語としての長さ・構成要素の多寡の歴史的変化の調査では、『平家曲節』は準アクセント的なレベルを反映しているため、アクセント単位を確認する資料としてはあまり役立たないので、当時のアクセント単位に基づいて分かち書きがおこなわれていると考えられるキリシタン資料を分析し、古代(声点資料によって正確に知りうる)や近代のアクセント単位と比較した。

### 4. 研究成果

(1) 研究の前半は計画通り順調に進んだが、高齢者が対象の臨地調査は、2020年からはCovid19のため中止せざるをえなかった。

それでも、本研究で用いている活用・「アクセント活用」の記述方法の有効性を確認することはでき、また、「アクセント活用」に関しては、白峰・阿田和・観音寺という、京阪アクセント地域の周辺部の、特異なアクセント体系をもつ3地点において貴重なデータを収集することができた。京阪系アクセント体系と一つに括ってはいっても、「アクセント活用」にはそれぞれの方言で顕著な個性の違いが見られるが、本研究以前に収集した越前海岸や佐渡の「アクセント活用」などもあわせ見ると、+アクセント素性(金田一語類の2類)をもつ動詞で「できあがった活用形の長さ」によってアクセントが変わるという特性を有するものは、京都方言で中世に起きた「大アクセント変化」によって「アクセント活用」が大きな損傷をこうむった際、活用形の語としての長さによってその損傷のありかたが異なっていたことの痕跡がそうした特性として残ったものと考えることができ、その損傷が修復さ

れふたたび「アクセント活用」として整えられる際、各方言でその修復の方向性が異なっていたため、現在見られるような方言ごとの違いを産み出したものと考えられることができる。つまり、京阪系諸方言の「アクセント活用」は、その見た目に大きな違いがあるにもかかわらず、みな「大アクセント変化」直後の京都の「アクセント活用」を母機構として、そこから分岐したものと想定しても矛盾のない形をしていると見る事が可能であるらしいとの見通しをえることができた。

(2) 日本語の 語 は、

a 最小呼気段落      b 最小発話単位      c アクセント単位

の条件をともに満たしている言語単位と考えられるが、このうち、歴史史料でも確認が可能なcをものさしとすることで、動詞・形容詞の 語 としての長さの時代ごとの違いを計測することができる。

平安時代京都方言の動詞にくらべると、現代語の動詞は、別語として後続していた文法要素をどんどん取り込んで内部要素とし、長大化してきたという大きな歴史的变化を遂げていることがわかる。

アクセントを直接記録している史料が存在しない時代についても、アクセント単位を分かち書き単位として利用しているローマ字書き史料などを持ちいれば、動詞の語形拡張の進捗状況をとらえることができる。

現代の東京式アクセント諸方言の「アクセント活用」は、一見、平安時代京都方言のそれとは大きく異なっているように見えるが、現代東京式アクセントの動詞から、後世拡張されてきた部分を取り除き、平安時代の動詞の長さにそろえて比較してみると、+アクセント素性(金田一語類でいえば2類)であることを表示している標識は、その具体的な実現形(現代東京式では下がり目、平安京とでは上がり目)こそ異なるものの、それが置かれているのはまったく動詞語形の同じ位置であることがわかる。これは、現代東京式諸方言の「アクセント活用」が、「大アクセント変化」をこうむる以前の京都方言の「アクセント活用」を母機構としてそこから分岐したものと考えても矛盾がないことを示唆するものとして重要な発見である。

(3) 活用については、文献資料による歴史的研究において進展がみられた。

古典語や九州方言に見られる二段活用動詞は、一つの動詞でありながら二種の語幹をもち、それを活用形によって使い分ける「複語幹動詞」ととらえると、これまで、特例・異例と考えられてきたさまざまな文法形態も統一的に説明ができるようになる。二段活用が一段化してゆくという歴史的变化も、「語幹を切り替える煩雑なシステムから、一つの語幹を一貫して用いるシンプルなシステムへ」ととらえれば、その動因を「単純化」の傾向として理解することができる。

(4) 動詞の音便形の発生・成立過程は、まずその第一段階として、活用によって一語の内部で動詞語形が一旦完成したのち、語の境界を超えて、対象となる音形を変える「活用後音転」の一種として平安初期に成立し、つぎに第二段階として、中世に、先に述べたように動詞が後続の語を取り込んで語形を拡張させてゆくようになった際、取り込まれた後続語がもはや独立を失い動詞の内部要素となってしまうことを示すために、元の動詞と元の後続語の両者を融合させるこの「音転」のメカニズムが、活用システムの一部として組み

込まれるに至ったという、二段階の歴史的過程としてとらえることが妥当であるとの見解に至った。

(5) 他の動詞構成要素の組み立て機構との違いを見ることで、活用というものの基本的性格をとらえるため、自他標識の膠着方法と動詞活用との比較を行った。自他標識では、そのタイプごとに膠着対象となる動詞の範囲が限定されており、構成要素間で母音と母音が並んでしまう際の膠着は「母音融合」という方法によっておこなわれるのに対し、活用は、どんな動詞にあってもおこなわれ、構成要素間で母音と母音が並ぶ時の膠着も「子音挿入」という方法でおこなわれるという違いが認められるが、この2点のありかたを変えることで、決まった動詞にしか付かない自他標識から、広く動詞に活用を介して付くヴォイス接辞(受身・使役・可能)が生まれてくることも確認できた。なお、複合名詞では、構成要素間で母音と母音が並ぶ時の膠着は、一方の「母音脱落」によっておこなわれるので、「子音挿入」という膠着方法は活用ならではの特徴といえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 屋名池誠	4. 巻 117
2. 論文標題 続日本紀宣命の「宣命書き」システム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 18-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 屋名池 誠	4. 巻 10
2. 論文標題 忘れられた分かち書き方式 その再評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 114-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 屋名池 誠	4. 巻 124
2. 論文標題 日本語動詞活用の調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 124 - 145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 屋名池 誠	4. 巻 852
2. 論文標題 「ら抜き言葉」はどこから来たか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 三色旗	6. 最初と最後の頁 10 - 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 屋名池 誠
2. 発表標題 動詞形態論パネル・ディスカッサントから
3. 学会等名 シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」（国立国語研究所）（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 屋名池誠（沖森卓也編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 610
3. 書名 歴史言語学の射程（沖森卓也氏退職記念論文集。論文「漢文の蔭の日本語表記 続日本紀宣命の逆順語 表記」を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------